

時計は知性を主張する



身につける時計の放つ個性を
自分のものにしていきたい

蝶ネクタイがトレードマークの中村伊知哉氏。取材当日はイエローをテーマにしたコーディネートで登場した。

「毎朝、起きた気分で、今日は赤、もしくは青、黄色」とテーマを決めて、シャツや靴、時計を選んでいきます。今日は黄色の気分だったので、ネクタイはイエロー、時計もイエローゴールドのカルティエです」

収納ケースには遊び心のある時計がにぎやかにラインナップされている。

「デザインや色といった、その時計の持っている個性が、自分の気分に合っているかを判断して時計は選びます。ブランドを気にせず、インターネットで目に留まった、気軽につけられる時計を求めることも多いですね」

よく使い込まれたカルティエのパンテールは郵政省の職員としてパリに滞在していた時に購入したもの。

「当時はフランスのメディア政策などを聞き出して、日本に報告するといういわばスパイ(笑)のような仕事をしていました。閉鎖的とも言えるフランス社会に入り込むために、何かフランスとの関わりを示すものを身につけることが必要だと思つて、カルティエの時計を買うことにしたのです」

カルティエを身につけフランスへの敬意を表することは、自分の気持ちを前に出すきっかけにもなったという。

「時計を含めたファッションには、その人のキャラクターだけでなく、生き方に対する思いも表われているように

思っています。ミラノの街角で道行く人を眺めるのが好きなのですが、以前、びしりと決めた男性に目を奪われたことがあります。手元をよく見るとそこだけおもしろいような時計をつけている。そうやって隙を見せられるところが心憎いですよね」

中村氏が今、気になっているのが銀色と黒の組み合わせ。これまでは洋服も明るい色をよく選んでいたが、ここに黒を加えて、身につけるものから自意識の改革を図りたいそうだ。

「私は時計をじっくり眺めることが多いです。それは単に時刻を知るためではなく、時計が放つ個性と自分との距離を確かめたいから。カルティエのタンクアメリカンには大人としてのしなやかな魅力が感じられる。身につけて眺めることで、少しずつでも距離を縮めていきたいと思っています」

中村伊知哉



61年生まれ、京都出身。慶應義塾大学教授、博士。郵政省通信政策局でマルチメディア政策、インターネット政策を推進した経験を生かして渡米し、MIT客員教授に就任。現在はNPO法人「CANVAS」副理事長を兼務。近著に「通信と放送の融合」のこれから(翔泳社)。(株)ホリプロスポーツ文化部所属。

次に狙う1本

サイズ以上の存在感が
引き立てるしなやかな魅力

Cartier
Tank Americaine LM



いろいろなバリエーションが存在するタンク基本となるタンクルイカルティエのデザインが普遍的であるからこそ、数多くの派生モデルを作り出せるのだろう。現在新品で購入可能なタンクは5タイプだ(タンキッシェムは女性モデルだが)。このタンクアメリカンは1980年代後半に発表された当時としては大型の長方形ウオッチ。文字盤の面積に対して金属部分の面積が多いので、デザイン的な力強さも感じる。そのため、今の時代には決して大きいとはいえないが、サイズ以上の存在感があるのである。長方形ではなく曲線も月いたレールウェイのデザインがカルティエらしくお洒落だ。自動巻き。18KWG。¥1,449,000(カルティエインフォメーションデスク)